

【優秀賞】

白いタオル

久多里スマ子・大阪府富田林市

「危ない、座りなさい。」

私の怒鳴り声が聞こえないかのよう少年は周りの机の上を渡り歩いた。引きずり下ろそうとすると、教室から飛び出し、しばらく帰つてこなかつた。運動場を走り回り遊具で遊び、汗だくだくで帰つてきた。怒るとまた飛び出して行く。白いタオルを差し出すと「汚れるで」「いいよ。持つてないでしょ。」「家に白いタオルないもん。」こんなやりとりの後、やつと椅子に座つた。以後毎日白いタオルを用意した。白いタオルが彼と私を結びつけ、信頼関係の糸口になつた。教師生活初め頃の経験である。

私は彼との出会いで教師としての姿勢を身につけたように思つている。自分の思い通りに運ぼうとすると、相手もまた腹をたてる。常に真心を込めて接し、自分が腹をたてない方法を考えるようになつた。

彼は三年生になつて転校してきた。いつも飛び回つてゐるわけではない。本の読み聞かせなどは、のめり込んで聞いているしキラキラした目で授業に参加してゐる時もある。しかし、書くことは一切しない。作文用紙を渡そうとしても受け取ろうともしないのだ。理由を聞いても「おもろない。」と言うだけだつた。ひとときも彼のことが頭から離れなかつた。家庭訪問を何度もしたが、一人親の父に会えなかつた。一間に布団が敷きっぱなしで勉強するスペースなどなかつた。

白いタオルのおかげで、少しずつ話せるようになつた。「先生、タオル。」「いつもの場所よ。早く帰つてくれて嬉しいわ。」

ある時私ははつと気づいた。みんなが静かに書き出すとじやまをする。もしかして、字を知らないのではないか。私は彼にプリントを渡しながら、「書かなくていいから、自分の名前だけ書いて。」「名前だけでいい?」と名前を書いた。驚いたことに自分の名前も鏡文字になつてゐた。残して教えようとしたが帰つてしまふ。彼にどうしたら教えることができるのか考えあぐねていた。

宿題を忘れる子を残して学校でさせることにした。ところが他の子も残りたいと言い出し、みんな残ることになつた。「さよなら。」と言つて教室から出る。そして「ただいま。」と入つてくる。私はお母さんになつて「お帰り、遊ぶ前に宿題しなさいよ。できたらみんなで遊ぼう。」と言つた。みんなのおかげで彼も残つて勉強した。できる限りおもしろく文字を教え、できたら褒めていると、興味を持ち始めあつという間に平仮名もカタカナまでも覚えてしまつた。みんなは「お前、頭いいな。出来る子や。」と褒めていた。勉強した後

一緒に汗だくだくになるまで遊んだ。数枚の白いタオルをみんなで使った。彼は次第に机の上を飛び回らなくなつていき、私は何とも言えない充実感を味わつた。一人ひとりを大事に見る大切さと集団の力の大切さを学んだ。

遠足のお知らせをしていた時

「僕行けへんで。今まで行つたことない。」

「行きたくないの？」

「行きたくてもお父さんが行かせてくれん。」と言う。彼は一年生から一度も遠足に行つたことがなかつたそうだ。私はさつそく家庭訪問をし、父が帰るのを待ち、彼を遠足に行かせて欲しいと頼んだ。「こいつが行きたくないと言うからしかたないやろ。」と言われた。私は行きたいと言つていた彼はお父さんの前では行きたくないと言つた。夜中まで頼み込んだが、「リュックもないし、弁当もつくれん。行かせんといつたら行かせんのや。」と追い出されてしまった。やつと間に合つた終電の中でどつと疲れが出て、気分も身体もひしやげて何も目に入らなかつた。

私は次の日だめもとでお弁当と白いタオルを持つて行つた。クラスの子が私を見るや否やうれしそうに走つてきて、彼が来ているという。リュックではなく布袋にパンを入れて來ていた。私は思わず大きな声で「みんなで行ける遠足、最高。」と言うとみんなも「最高、最高。」と嬉しそうに繰り返した。最高の遠足だつた。私達を祝福するように、気持ちのいい青空だつた。帰りに乗つた電車の中は明るく隣の見知らぬ人に話しかけてしまつた。遠足の疲れは一切感じず、汚れた白いタオルがいとおしく首に巻いて帰つた。

二十年過ぎたある日、彼から是非会いたいと一通の手紙が届いた。中華料理屋で、てきぱき指示をする彼を見て、胸が熱くなつた。彼は私を見るや否や「先生ありがとうございます。」と駆け寄つてきた。「立派になつたね。見違えたわ。」「先生の写真と白いタオルいつも持つています。」遠足の時の写真を見せ、「つらい時、先生の笑い顔見るとやる気が出てくるんです。」うれしくて涙が出てきた。「私も悩んだ時、白いタオル見てあの頃のこと思い出すと、元気出るのよ。」と言つて別れた。心晴々乗つた電車は彼が初めて遠足に参加した帰りの電車のように明るく感じた。